

## 京都大学ブータン友好プログラム： 第10次までの訪問団派遣

松沢哲郎

京都大学霊長類研究所

### はじめに

京都大学ブータン友好プログラム（英文略称 KU-Bhutan）の現況について解説したい。本プログラムは、ブータン国を舞台に、京都大学固有の野外研究の伝統を踏まえた全学的な国際交流事業をおこなうものである。ブータンは、人口約70万人のヒマラヤの小国だ。最初の縁は、1957年晩秋の桑原武夫教授らによる第3代王妃（Ashi Kesang Choeden Wangchuck）の歓待にあった。以後、連綿と関係が続いている（詳細については、松沢、2011; 2012; 松沢ら、1995）。しかし、ややもすると、交流の歴史的経緯が忘れられがちである。また、大きな大学なので横の連携も必ずしも十全ではない。さらには、ブータンと京都大学の関わりが、まだ一般には広く認識されていない。そこで、日本で最もブータンと縁の深い大学として、並存する部局独自の取り組みを束ね、ブータンをひとつの「学術アリーナ」に見立てた活動を考案した。それが京都大学ブータン友好プログラムである。ブータン王立大学ならびに保健省等と協力して、ブータンの国是である国民総幸福量（Gross National Happiness; 略称 GNH）をはじめ、健康、文化、安全、生態系、相互貢献の5つの側面から総合的な交流をおこなう事業である。そのために、多様な分野のフィールド調査、学術交流、データベース整備、映像・文書アーカイブ作製、HPからの発信、次世代を担う若手研究者の交流プログラム等、を推進する。本事業の活動については、ぜひ以下のサイトを参照されたい。HP 参照、<http://www.kyoto-bhutan.org/>

### 本事業の目的とブータンという国の概要

京都大学ブータン友好プログラムの目的は、国の大小を超えたイコールパートナーとしての日本とブータンを意識して、京都大学がその架け橋と

なることである。

ヒマラヤの王国ブータンは、緯度でいえば沖縄、国の大きさは九州、人口は約70万人で鳥根県程度である。南はインド平原から続く亜熱帯の低地の標高100mから、北はヒマラヤの標高7500mまで多様な生物の垂直分布がある。北は中国、南はインドという大国に挟まれて国の舵取りはむずかしい。

そのなかで、現在のワンチュク王朝が国を統一してほぼ100年の歴史がある。歴代の王が英明で、とくに先代の第4代国王（Jigme Syngye Wangchuck、1955年11月11日生まれ）は、父王（Jigme Dorji Wangchuck、1928年5月2日生まれ1972年7月21日逝去）のナイロビでの客死を受けて16歳で即位してから、国民総幸福 GNH を提唱し、独自の国づくりをおこなってきた。自ら王政を廃して、憲法を發布し、議会を興し、2008年に民主的な立憲君主制に正式に移行した。この間、勅令を発して、2006年12月9日に王位を息子の第5代国王（Jigme Khesar Namgyel Wangchuck、1980年2月21日生まれ）に譲った。ブータンは仏教を基幹とした農業国であり、その国のたたずまいは日本の往時をしのぼせるものがある（Ashi Dorji Wangmo Wangchuk, 1999; Bhutan Meida Services, 2012; Pek-Dorji, 2007）。

先般、2011年11月に、新婚の第5代国王とその王妃が日本を国賓として訪問した。国会での演説や、「勇気という名の龍が心に住んでいる」と小学生に語りかける姿に、多くの人々が感動した。限られた時間の中で各地をめぐり、同年3月11日におきた東日本大震災の被災地のひとつである福島県相馬市の海辺で祈りを捧げた。じつはその場所は、天皇・皇后両陛下が半年前に同じく祈りを捧げた場所でもあった。あまり一般に意識されていないが、大震災直後に、ブータンから日本へ

義援金が届けられた。そして、ブータンの国王をはじめ多くの人々がバターランプに灯りをともして犠牲者に祈りを捧げてくれた。同年は奇しくも日本とブータンの国交樹立25周年にあたる年だった。

## 1957年秋：ブータンと京都大学の交流の歴史

こうした両国の縁を結んだのは京都大学である。半世紀前の1957年晩秋に、第3代王妃殿下が、母堂と姉君とともに来日して京都に滞在した。当時まだ国交がなかったので日本政府はいっさい何もしなかった。そのときに京都大学教授である桑原武夫・芦田譲治の両氏が王妃一行を接遇したのである。

彼らは今西錦司らとともに社団法人京大士山岳会(AACK)を興して、カラコラム、ヒンズークシュ、ネパールでの探検をおこなっており、いずれブータンでの学術調査を望んでいたからである。さらにいえば、それはブータン・ヒマラヤへの遠征の布石だった。なぜなら、ほとんどすべて未踏峰だったからだ。

AACKの当初からの目標はきわめて明瞭で、世界に先駆けてブータン・ヒマラヤの未踏の最高峰であるガンケルプンツム(Gangkar Puensum、7570m)の初登頂をめざしたものだ。翌年1958年、AACKは、桑原武夫隊長のもとパキスタン・カラコルムの未踏峰チョゴリザ(7654m)に初登頂した。ガンケルプンツムは今もまだ登られていない。現在では、世界最高の未踏峰になっている。

ブータン第3代王妃との邂逅が機縁になって、翌年にAACK会員・中尾佐助のブータン初調査が実現し、その成果はのちに彼の「照葉樹林文化論」に結実した(中尾、1959)。さらに、彼が大府立大学の助教授として指導した学生の西岡京治を、JICAのプログラムで農業指導のためにブータンに長期派遣することになった(西岡・西岡、1978)。ダショーという称号を与えられた西岡は、今でも、ブータンで最も有名で尊敬されている日本人である。

それ以後、桑原の1969年の訪問(桑原、1978)、同年の松尾稔(京大工学部教授のちの名古屋大学長)の隊の訪問、1985年の堀了平(京

大病院長)らによるブータン・ヒマラヤの未踏峰のマサカン峰(7200m)初登頂(堀、1986)と、京大とブータンの友好は続いた。

近年では、フィールド医学、霊長類学、家畜遺伝管理、教育学などの調査が続いている。しかし、そうした野外調査には、縦のつながりと横の連携に欠けるきらいがあった。そこで、2010-2011年度に、全学協力経費(総長裁量経費)の支援を受けた京大の全学的事業として、「京大ブータン友好プログラムKU-Bhutan」が発足した。京大の研究所群である22の研究所・研究センターの総意として始まった事業である。

2010年10月に最初の訪問団がブータンで第4代国王に拝謁し懇談の機会を得て、相互交流の礎ができた。このときをもって、本事業の正式な発足とみなすのが妥当だろう。

## 本事業の目的と意義

2010年10月の第1訪問団以後、合計10隊のべ71名の派遣事業をおこなった。教員・事務職員・大学院生・学部生がブータンを訪問し、多様な分野からの交流の種を撒いた。さらには、2011年2月には第4代国王の名代として来日したケサン・チョゼン王女らを松本紘総長らが接遇し、同年9月には上院議長一行を赤松副学長以下が応対して京大とブータンの交流を進めた。2012年9月には、王立ブータン大学の一行を招聘し、松本総長との面談がおこなわれた。

「京大といえばブータン、ブータンといえば京大」というような一般のイメージを定着させるのが、本事業のめざすところである。

学術の実質的な交流は、フィールド医学が保健省の支援を受けて「地域の伝統に根ざした高齢者検診システム」の導入に関与するなど、着々と成果を挙げている。その中心人物が松林公蔵であり、その指導を受けてきた坂本龍太医師が2012年4月に京大白眉助教に採用された。また霊長類研究所の西澤和子研究員(小児科医)がティンパー王立病院に長期派遣されている。こころの未来研究センターにはブータン仏教学の分野が創設され、熊谷誠慈が赴任してきた。こうした若い世代の研究者を中心に、ブータンで多様な学術研究を展開する展望が開けつつある。そこでKU-Bhutanという学術プラットフォームを作って、ブータンを「学



図1 2010年10月19日、第1訪問団が第4代国王（中央）に拝謁した（提供：ブータン王室）。この日をもって、京都大学ブータン友好プログラムの正式な発足とする。

術アリーナ」に見立てた多様な教育・研究を展開推進するのが本事業の意義である。

一般的にいて大学の国際貢献はともすれば没個性的なものになりがちだが、京都大学=探検=フィールドワークという図式で、ブータン国を舞台に、京都大学固有の野外研究の伝統を踏まえた全学的な国際交流事業をおこない、本学らしい国際貢献をめざしたい。

### 本事業の推進体制

推進体制は、2010-11年度に立ちあげたオール京大（研究所群が主導して、文・理の学部・研究科そして附属病院を含めた体制）を堅持しつつ、2012年度以降は、その代表世話役だった霊長類研究所が事業の主務部局となった。そして、京都大学ブータン友好プログラムのもとのブータン調査経験者、とくに部局長や隊長経験者を主体として、全学的な世話人組織を構築して推進してきた。

具体的には、2011年度から2012年度へと橋渡しした際の世話人は以下の通りである。なお全員がブータン調査を経験している。

松沢哲郎（霊長類研究所長、代表世話人）、松林公蔵（東南アジア研究所教授、副代表）、吉川左紀子（こころの未来研究センター長、副代表）、小林慎太郎から藤井滋穂へ（地球環境学堂長）、

辻本雅史（教育学研究科長）、岡田憲夫（防災研究所教授）、橋本学（防災研究所教授）、松岡雅雄（ウイルス研究所長）、柴田昌三（フィールド科学教育研究センター長）、小林繁男（アジア・アフリカ地域研究研究科）、杉本均（教育学研究科教授）、明和政子（教育学研究科准教授）、幸島司郎（野生動物研究センター教授）、湯本貴和（霊長類研究所教授・4月着任）、川本芳（霊長類研究所准教授）、竹田晋也（アジア・アフリカ地域研究研究科准教授）、中島智之（経済研究所教授）、坂本龍太（白眉プロジェクト助教・4月着任）、山本真也（霊長類研究所助教）、小野一代（霊長類研究所総務掛長）、以上20名。なお事務局として、平田加奈子（霊長類研究所非常勤研究員）がHPを担当している。

京都大学ブータン友好プログラムは、霊長類研究所の特別経費<プロジェクト分：国際卓越「人間の進化」>の支援を受けて、2011年度からプロジェクトラボを総合研究棟1号館の1室に構えた。そこを拠点にし、訪問団の派遣や、招聘団の受け入れをおこなった。文理の枠を超え、研究科・研究所の敷居をまたぎ、教員・事務職員が連携し、大学院生や学部生をまきこみ、つねに男女が共同参画する教育・研究・アウトリーチ活動を展開している。

## 学術プラットフォームとしての役割

本事業の具体的な役割は、ブータンに関わる京大の多様なプログラムを連携する「学術プラットフォーム」の整備である。日本で最もブータンと縁の深い大学として、ブータン王立大学ならびに保健省等と協力して、ブータンの国是である国民総幸福量（GNH）をはじめ、健康、文化、安全、生態系、相互貢献の5つの側面から総合的な交流をおこなってきた。そこで、「京都大学ブータン友好プログラム、KU-Bhutan」と称する学術プラットフォームを学内に作る。

学術プラットフォームの役割は大別して3つある。

第1に、相互連携である。各部局・各研究者がおこなっているブータン研究の相互連携を図るために連絡会を構成し、HPやデータベースやアーカイブの作製をする。個々の部局や個人の努力を、京都大学としての一体感を醸しだしつつ発信したい。

第2に、派遣招聘である。交流と言い換えても良い。大学院生と学部生を中核に次世代のブータン研究者を涵養し、京都大学らしいフィールド教育をおこなうための派遣事業をする。大学全体の事業として、ブータンとの交流を促進するための派遣や招聘である。

すでに現時点（2013年1月）までの2年3か月間に、合計10隊をブータンに投じて学問の裾野を広げた。こうしたブータン入門編も重要なので、最初の2年間すなわち2010年度は年4回25名、2011年度は年4回28名の派遣をおこない、2012年度には年2回18名の派遣をするともに年2回12名の招聘事業を企画した。

さらに実践編として、「地域の伝統を活かした高齢者検診システム」を開発中のフィールド医学や、人間とそれ以外の動物の共生を探る霊長類学・野生保全管理学や、東部ブータンへ展開している教育学や、ブータン仏教学に力を入れているこころの未来研究センターや、防災科学の現地調査隊など、それらに参加する教職員や学生と緊密な連携をとって、学術プラットフォームとしての役割を担っている。逆に、京都大学としてブータンから招聘・来学する際には、その受け入れ窓口としての役割を果たしている。

第3に、社会貢献である。京都大学として眼に

見える社会貢献・アウトリーチ活動をするために、これまでの映像記録をまとめたアーカイブを作ったり、メディアと連携した発信（たとえば朝日新聞の「アエラ」2012年9月「知の大山脈・京都大学」への協力）をしたり、将来的には時計台での展示などを企画している。これまでに1958、1969、1985年の調査のスライドやネガをデジタル化する事業に一部着手した。また1957 - 1958年の渡航交渉を記録した文書類やフィールドノートの収集とデジタル化も構想されている。なお、それらの活動の延長として、文部科学省の拠点形成経費や環境省のSATREPS事業などの外部資金の獲得に向けたプロジェクトを、京都大学として形成することを視野に入れている。その際には触媒の役割を果たすことになるだろう。

学術プラットフォームとしての2012年度（平成24年度）の顕著な進捗として、以下の3点を挙げる事ができる。

第1に、京大ブータン友好プログラム事業のHPの英語版を充実させた。これによって今後さらに国際的な対応を進める。

第2に、前2年間8度にわたる遠征の経験を活かして、2012年度は、第9次隊、第10次隊を派遣した。全10回の派遣団の際立った特徴は、「だれでも参加できる」という点だろう。つまり、常勤教職員だけではない。非常勤事務職員や、学部学生や、大学院生や、研究員など、京都大学の多様な構成員に広く門戸を開いた。とくに学生・大学院生等の派遣については、京大教育研究振興財団からいただいた経費を充当した。

派遣団は、公募によって人選をしている。すなわち、学部・研究科・研究所等の長を通じて派遣を周知し、またHPで公募した。応募者自身に志望動機を書いてもらい、直属の上司ないし指導教員に推薦状をもらい、その応募書類一式をすべての世話役が見て評価した結果に基づいて人選している。

ブータンは観光局が観光客を完全にコントロールしていて、ハイシーズンの6ヶ月（3、4、5、8、10、11月）は1日250ドル、その他の6ヶ月（1、2、6、7、8、12月）は1日200ドルが課金される。したがって、滞在期間の長短で異なるが、往復運賃と滞在費を合わせて、1名の派遣に概ね35万円から40万円が必要である。



第3に、派遣に対応して招聘の事業を開始した。2012年9月に、ブータン王立大学副学長であるダシヨール・ペマ・ティンレイ一行を京都に迎えて、松本紘総長との面談が実現した。2012年度内に、第2団の訪問団7名を受け入れる方向で調整を進めている。

次の2013年度は、5月に、松本紘総長一行がブータンを訪問する予定である。ブータン王立大学と京都大学のあいだで正式な協力協定（MoU）を取り交わす。そうした日々の蓄積の結果を、「京都大学とブータン展」（仮称）というかたちで結実させたい。時計台の歴史展示室と京大サロンを使った歴史写真展である。在日ブータン大使館ならびにメディアの協賛を得て、国王夫妻の来日以来の熱気がさめやらぬ雰囲気なかで、京大の半世紀を越える関与を実証的に内外に知らしめたい。

京都大学全体としてのブータンへの関与を支える「学術プラットフォームの形成」に向けてこれからも努力していきたい。本稿では、京都大学とブータンという紐帯が今後ますます強まることを願って、第10次までの訪問団の足跡を派遣概要として以下に記す。

### 第10次までの訪問団の派遣概要

2010年度に4隊合計25名、2011年度に4隊合計28名、2012年度に2隊合計18名をブータンに派遣した。最初の3年間で、10隊合計71名の京都大学の教職員や学生がブータンに渡航したことになる。以下に、それぞれの隊の日程、構成、旅程、概要を述べる。

#### 第1次訪問団、6名

日程

2010年10月15日－2010年10月22日

訪問団構成

松沢哲郎 霊長類研究所・教授・所長、比較認知科学・霊長類学  
 松林公蔵 東南アジア研究所・教授、フィールド医学  
 吉川左紀子 こころの未来研究センター・教授・センター長、認知心理学  
 小林繁男 アジア・アフリカ地域研究研究科教授、リハビリ森林学

中嶋智之 経済研究所・准教授、マクロ経済学  
 八木定行 霊長類研究所・事務長  
 旅程

10.15、関西空港－バンコク

10.16、バンコク－パローティンブー

10.17、ティンブー－プナカ－ティンブー

10.18、ティンブー（Royal Thimphu College, Center for Bhutan Studies 等訪問）

10.19、ティンブー（王宮訪問）

10.20、ティンブー－パロ（松林のみカリンへ）

10.21、パロー－バンコク

10.22、バンコク－関西空港

概要

ティンブーで第4代国王に謁見し、今後の活動への理解を求めた。先方からはかつての調査隊の映像アーカイブ提供の依頼があった。10.19午後、総合地球環境学研究所（地球研）立本成文所長一行が地球研と保健省との学術交流協定を締結。第1次訪問団から松林教授が出席した。その他、関係省庁と小学校等を訪問した。

#### 第2次訪問団、5名

日程

2010年11月19日－2010年12月1日

訪問団構成

橋本学 防災研究所教授・副所長、測地学、固体地球物理学  
 堤大三 防災研究所・准教授、水工水理学、砂防工学  
 藤澤道子 野生動物研究センター・助教、老年学、フィールド医学  
 山本真也 霊長類研究所・助教、霊長類学、比較認知科学  
 栗原洋介 理学部3回生

旅程

パロ→ティンブー→プナカ→（トレッキング）→サムテガン→ポプジカ→ワンデュー・ポダン→ティンブー→パロ。

概要

ティンブー・パロ等において、王立ブータン大学はじめ、同国の大学を訪問し、研究者と懇談した。また、プナカ・ポプジカ等において高等学校、小学校を訪問し、特に教育へのGNHの導入を中心に、教育現場の現状について伺った。訪問期間中、

2泊3日のトレッキングを敢行し、当地の文化から動植物や地形・地質等について見聞を深めた。

### 第3次訪問団、7名

日程

2011年1月

訪問団構成

岡田憲夫 防災研究所教授・所長、災害リスクマネジメント、総合防災学  
丸山達也 経済研究所先端政策分析研究センター・准教授、公共政策学  
池田巧 人文科学研究所・准教授、シナ・チベット語方言史  
北守顕久 生存圏研究所・助教、生活圏構造機能  
塚上公昭 宇治地区事務部・研究協力課長  
新野正人 霊長類研究所・事務職員  
仲澤伸子 理学部4回生

- 1.23、 関西空港→バンコク
- 1.24、 バンコク→パロ→ティンパー
- 1.25、 ティンパー（政府関係機関訪問、タシチョゾンを見学）
- 1.26、 ティンパー（ゾンカ委員会訪問）→ブナカ（ブナカゾンを見学）
- 1.27、 ブナカ（Collage on Natural Resources を訪問、チミラカン見学、New Town 建設現場とワンデュポダンを見学）→ティンパー（JICA 訪問）
- 1.28、 ティンパー（ターキン見学）→パロ
- 1.29、 パロ→バンコク
- 1.30、 バンコク→関西空港

概要

ティンパー、ブナカ、ワンデュ・ポダン、パロの各地で、実際の自然・地域の状況を見て回るとともに、関係省庁・大学などを訪問。教育省大臣、農林省大臣、The Royal University of Bhutan, College of Natural Resources の学部長らとも会談し、自然環境・地理・地勢、災害、都市社会開発の現状、GNH の導入の実際、言語文化政策等について幅広い情報収集に努めた。また今後のブータンとの研究協力の課題についても意見交換した。

### 第4次訪問団、7名

日程

2011年3月24日-2011年3月31日

訪問団構成

小林愼太郎 地球環境学堂・教授・学舎長、地域計画学  
森本幸裕 地球環境学堂／農学研究科・教授、景観生態学  
松下和夫 地球環境学堂・教授、地球環境政策学  
吉川左紀子 こころの未来研究センター・教授・センター長、認知心理学  
柴田昌三 フィールド科学教育研究センター・教授・副センター長、里山資源保全学  
中林雅 理学研究科（野生動物研究センター）修士課程  
古川陽介 経済学研究科修士課程

旅程

- 03.24、 関西空港 → Bangkok
- 03.25、 Bangkok → Paro → Wangdue
- 03.26、 Wangdue → Talo →（徒歩）Punakha → Wangdue（Renewable Natural Resources Research Centre, College of Natural Resources, RUB）→ Thimphu
- 03.27、 Thimphu
- 03.28、 Thimphu（Royal University of Bhutan 本部、Royal Society for Protection of Nature, GNH Commission）- Haa
- 03.29、 Haa - Paro（Agricultural Machinery Centre（旧西岡農場））
- 03.30、 Paro → Bangkok
- 03.31、 Bangkok（30日夜出発）→ 関西空港

概要

ブータンの中心都市（ティンパー、ブナカ、パロ等）にあるいくつかの研究・教育機関を訪問し、今後の共同研究や教育交流について意見交換を行った。Talo や Haa では、ブータンの田舎の景観のすばらしさに触れた。

### 第5次訪問団、7名

日程

2011年7月5日-2011年7月13日

訪問団構成

吉川左紀子 こころの未来研究センター・教授・センター長、認知心理学  
 松岡雅雄 ウイルス研究所教授・所長、ウィルス学  
 小野一代 霊長類研究所・総務掛長  
 熊谷誠慈 次世代研究者育成センター（白眉）・助教、仏教学  
 川本純 化学研究所・助教、分子微生物学  
 小阪花梨 農学部 1 回生  
 渡邊克巳 東京大学先端科学技術研究センター・准教授、認知科学

旅程

07.05、関西空港－バンコク  
 07.06、バンコク－パローティンブー  
 07.07、ティンブー トンサ  
 07.08、トンサーブムタン  
 07.09、ブムタン  
 07.10、ブムタン－プナカ  
 07.11、プナカ－ティンブー  
 07.12、ティンブー－パローバンコク  
 07.13、バンコク－関西空港

なお、渡邊は羽田空港から、小野は中部国際空港から参加した

概要

保健省で次官表敬および局長他のメンバーと会談を行い、医学研究、医学教育等での今後の研究協力や連携に関する意見交換を行うとともに、ティンブー王立病院、伝統医療院、ブムタン総合診療所等を視察した。また、ブムタン地区ニマルン寺のツェチュ祭、クジェラカンのツェチュ祭を視察するとともに、各地のラカン、ゾンを訪ね、ブータンの仏教文化に触れた（ダウンゲルゾン・キチュラカン・トンサゾン・ジャンバラカン・ジャカルゾン・プナカゾン）。雨期だったがトンサで小雨が降った以外は全日天候に恵まれ、快適な旅程だった。

第6次訪問団、4名と3名

日程、2011年10月、および2011年11月

目的1：国王結婚式への参列と第3代王妃への謁見

訪問団構成

松林公藏、東南アジア研究所・教授、フィールド医学

榊原雅晴、京都大学学士山岳会（AACK）・毎日新聞社、記者  
 竹田晋也、アジア・アフリカ地域研究研究科、准教授  
 桑原文吉、京都大学卒業生、故桑原武夫教授のご令息

旅程

10.13 BKK-Paro-Punakha  
 10.14 Punakha (Royal Wedding)- Thimphu  
 10.15 Thimphu (Royal Wedding, be received in audience to Mother Queen)  
 10.16 Thimphu Paro- Delhi

目的2：保健省 Biennial Health Conference 参加  
 訪問団構成

松林公藏 東南アジア研究所・教授、フィールド医学  
 奥宮清人 総合地球環境学研究所・准教授、フィールド医学  
 小林尚礼 京都大学卒業生、京都大学学士山岳会（AACK）、写真家

旅程

11.04 BKK-Paro-Thimphu  
 11.05 Thimphu- Bhumtam  
 11.06 Bhumtam-Mongar  
 11.07-09 Biennial Health Conference of Ministry of Health  
 11.10 Mongar-Tonsa  
 11.11 Tonsa-Thimphu  
 11.17 Thimphu-BKK

第7次訪問団、6名

日程

2011年11月22日－2011年12月09日

訪問団構成

中嶋智之 経済研究所・教授、マクロ経済学  
 山本真也 霊長類研究所特定・助教、比較認知科学  
 塩見康博 工学研究科・助教、交通工学  
 Thupten GAWA 文学研究科・教務補佐員、チベット仏教  
 田和優子 理学研究科修士1回生（野生動物研究センター）、野生動物・動物園動物学  
 岡部岳人 農学部・食料環境経済学科4回生

## 旅程

11/22 Kansai - Bangkok  
 11/23 Bangkok - Paro - Thimphu  
 11/24 Thimphu - Punakha  
 11/25 Punakha - Gasa (Trek)  
 11/26 Gasa - Koena (Trek)  
 11/27 Koena - Taktshi Makang (Trek)  
 11/28 Taktshi Makang - Nulithang (Trek)  
 11/29 Nulithang - Day excursion to Masagang Base camp  
 11/30 Nulithang - Laya (Trek)  
 12/01 Laya - Halt (explore within laya vilalge)  
 12/02 Laya - Koena (Trek)  
 12/03 Koena - Gasa (Trek)  
 12/04 Gasa - Punakha - Wangdue  
 12/05 Wangdue - Phobjikha - Thimphu  
 12/06 Thimphu  
 12/07 Thimphu - Paro  
 12/08 Paro - Bangkok -  
 12/09 Kansai

## 概要

9泊10日にわたるガワ-ラヤ間トレッキングをおこなった。故中尾佐助先生が1958年に、京大山岳部が1985年に通ったルートでもある。当時との比較を目的に、同じ場所・同じアングルでの写真撮影を試みた。途中、小学校・森林局訪問などもおこない、車道の通っていない僻地での生活について見聞を広めた。首都ティンブーではCBS（ブータン研究所）・RSTA（道路交通安全整備局）・RSPN（王立自然保護協会）・JICAを訪問し、役人・研究者らとの情報・意見交換をおこなった。

## 第8次訪問団、8人

## 日程

2012年03月23日-2012年03月31日

## 訪問団構成

清水展 東南アジア研究所・所長・教授（第8訪問団団長）  
 劉徳強 経済学研究科・東アジア経済研究センター長・教授（第8訪問団副団長）  
 坂本龍太 総合地球環境学研究所・研究員（第8訪問団ジェネラルマネージャー）  
 深町加津枝 地球環境学堂・准教授  
 菊地哲広 再生医科学研究所・特定研究員

金本美慧 エネルギー応用科学専攻・大学院修士2回生

小澤大知 エネルギー基礎科学専攻・大学院修士2回生

萩原祐二 教育学研究科・大学院修士2回生

## 旅程

03.23 関西国際空港-バンコク  
 03.24 バンコク - パロ - Dongkakra village  
 03.25 Dongkakra village  
 03.26 Dongkakra village - プナカ - ワンディ・ポダン - ティンブー  
 03.27 ティンブー  
 03.28 ティンブー  
 03/29 ティンブー - パロ  
 03.30 ティンブー - パロ - バンコク  
 03.31 関西国際空港着

## 概要

3月23日15:00に関西国際空港Dカウンター（タイ国際航空）に集合した。関西国際空港離陸し、21:30頃バンコク国際空港に到着した。以後の行程で、パロからその日のうちにDongkakra villageへ移動する。途中ブータン名物の渋滞に巻き込まれ数時間立ち往生しブータンの洗礼を受ける。でこぼこ道に揺られながら暗くなって民家に到着し、家の方の温かさに疲れを癒す。Dongkakra village、Nubgang villageを探索し、民家では学生陣、教授陣、同部屋で雑魚寝をした。ティンブーへの帰路Chimi寺。プナカ・ゾンも訪問した。Punasanchu水力発電所建設現場見学。現場責任者から説明を受けた。トンネル内部の迫力に圧倒されるとともに、作業をされている方の御苦労に頭を垂れる。Royal University of Bhutan のPema Thinley氏、Dorji Thinley氏、Changa Dorji氏との会合にて京大とブータンの関係の歴史を紹介するとともに院生二人が発表を行う。京大への訪問、MOUの締結の打診も行う。Jigme Droji Wangchuk National Referral Hospital（ティンブー病院）で働かれている西澤和子氏にも同席いただいた。京都大学東南アジア研究所と保健省の間でMOUを締結した。保健省より昼食に招待いただく。Gross National Happiness Commission のRinchen Wangdi氏よりGNHについて講義を受け、首相フェロー高橋孝郎氏にも同席いただく。農業森林省のSangay Wangchuk氏より国の自然保護政策について



て講義を受けた。

Royal University of Bhutan の Pema Thinley 氏らより夕食に招かれ、お酒を酌み交わしつつ京都での再会を誓った。Royal Society for Protection of Nature の Lam Dorji 氏、Rinchen Wangmo 氏と会合を持ち、地球環境学堂からの学生派遣の可能性を探った。Jigme Dorji National Park のオフィスを訪問、Dodena 散策後、Cheri 寺院を訪問しハヌマンランゲールとの遭遇した。お世話になった Lhomen Tours に謝意を伝え、ティンブーを後にし、パロへ向かった。早朝起床し麓より Taktshang 寺院を拝み、3月30日 10:50 パロ空港を離陸しブータンを発った。

### 第9次訪問団、6人

日程

2012年08月25日から2012年09月02日

訪問団構成

山本真也 霊長研、特定助教、比較認知科学、第9訪問団団長

大見士朗 防災研究所、准教授、地震防災

内田由紀子 こころの未来、特定准教授、文化心理

西出俊 白眉、特定助教、ロボティクス

福島慎太郎 地球環境学堂・大学院博士3回生、地域研究・京都集落

馬場悠介 工学研究科・大学院修士1回生、交通工学

訪問先

8月25日：関空→バンコク

8月26日：バンコク→パロ→ハ

8月27日：ハ（小中高校見学、地震被災地見学）

8月28日：ハ→ワンデュポダン（焼失したワンデュポダンゾン見学）→プナカ（プナカ新市街見学）

8月29日：プナカ（プナカゾン見学・寺院見学）→ティンブー（西澤和子さんと夕食）

8月30日：ティンブー（王立ブータン研究所 Dasho Karma Ura 氏・地質鉱山局 Dowchu Drukpa 氏と面談、ティンブーゾン見学）

8月31日：ティンブー（王立自然保護協会 Lam Dorji 氏・JICA 仁田智樹氏と面談、大仏見学）

9月1日：ティンブー→パロ（西岡チョルテン参拝）→バンコク→

9月2日：関空帰着

概要

ハ・プナカ・ワンデュポダン・ティンブー・パロを訪れた。主な訪問地のひとつであるハでは、Lower Secondary School と Higher Secondary School（日本での小中・中高に相当）を訪問し、授業見学をするとともに、生徒・教師・校長との対話・情報交換をおこなった。ブータンでは国語であるゾンカ語の授業以外は英語でおこなわれているため、小学生でも英語をしゃべることができる。日々の暮らし・学校生活について、直接生の声を聞く貴重な機会を得た。また、ハでは2011年9月に地震をうけた被災地の様子を視察した。ブータンはコミュニティの結束が強く助け合い社会を築いている半面、防災意識の低さが問題ともなっているようだ。政府・地域のそれぞれが主導する復興計画についてインタビューなどを通じて情報収集した。自然とともに生きる人々の様子から、震災後の日本が学ぶ点も多い。ティンブーでは、王立ブータン研究所・地質鉱山局・王立自然保護協会・JICA を訪問し、それぞれの所長と会談・意見交換をおこなった。とくに王立ブータン研究所では、所長である Dasho Karma Ura 氏と1時間40分に渡る対談を実現し、ブータンの国民総幸福・自然観・宗教観について貴重な話を聞くことができた。これら対談はすべてビデオに記録できたので、後日テープを起こし、対談録として公表し、先方にも還元することを予定している。

### 第10次訪問団、12人

日程

2013年01月18日から2013年01月28日

訪問団構成

吉原博幸 医学研究科・教授、医師（団長）

藤澤道子 東南アジア研究所・特任助教

坂本龍太 白眉センター・助教

千石真理 こころの未来研究センター 特定研究員

道和百合 医学研究科・医員、医師

須永恵美子 アジア・アフリカ地域研究研究科 一貫制博士課程5年

平田義弘 医学研究科・大学院生、医師

加畑理咲子 医学部・学部5回生

丸山晃央 農学部・学部4回生

谷悠一郎 農学部・学部3回生

西垣昌代 宇治地区事務部・総務課長  
小野加奈子 医学部附属病院・総務課広報・企画  
掛 非常勤職員（病院長秘書）

#### 訪問先

1月18日 関西空港→バンコク  
1月19日 バンコク→パロ→ティンブー  
1月20日 サムテガン  
1月21日 サムテガン  
1月22日 サムテガン  
1月23日 サムテガン  
1月24日 ポブジカ  
1月25日 ワンデュ・ボダン  
1月26日 パロ  
1月27日 パロ→バンコク  
1月28日 バンコク→関西空港

#### 概要

パロの初雪で到着が遅れたため、予定されていた保健省とのミーティングがキャンセルになり、その日程調節のためサムテガン滞在を3泊に短縮した。サムテガンではキャンプまたは民家に宿泊し、地域の診療所（BHU）・患者宅訪問グループと村人と交流するグループに分かれて活動した。その他、テキ・アゴナ BHU、ポブジカ BHU 訪問、ワンディ県保健部長、ワンディ県知事との会談、保健省とのミーティングをおこなった。また、駆け足でティンブー、パロ、プナカを観光し、ポブジカでは飛来してきたオグロヅルを観察した。

#### 本事業の財政基盤と今後の展望

本事業の財政的な仕組みを記載する。本事業は、あくまで自主的な取り組みである。したがって本事業に割り当てられた大学の運営費交付金その他の財源は無い。特別な財源をもたないあくまで自主的な活動である。本事業への財政的な支援は、現在、4つの資源から成り立っている。

第1は、京都大学霊長類研究所の特別経費（プロジェクト分：国際卓越、事業名略称「人間の進化」、平成23-29年度の助成期間）である。人間の本性の進化的ならびに文化的基盤を探る研究プロジェクトである。この経費によって、西澤和子を非常勤研究員として雇用し、ブータンのティンブー王立病院に長期派遣している。2011年5月からすでに1年9か月が経過した。また京大構内にプロジェクトラボ1室を借り上げている。さら

に、後述の全学経費では足りないので、霊長類研究所に所属する教職員・学生をブータンに派遣するばあいは、この財源で自主的にまかなっている。

なお、この特別経費と連携して、霊長類研究所ならびに野生動物研究センターに所属する若手研究者を派遣するばあいには、霊長類研究所の主宰する ITP-HOPE 事業（平成21-25年度）ならびに AS-HOPE 事業（平成22-24年度）に依拠してきた。

第2は、文部科学省科学研究費補助金・特別推進研究（「霊長類の知識と技術の世代間伝播」、課題番号：24000001、代表者：松沢哲郎、平成24-28年度の助成期間）である。人間とそれ以外の霊長類の文化や伝統の比較研究という事業主旨のもと、平田加奈子研究員を雇用し、HPの整備による情報発信を担っている。

第3は、全学協力経費（総長裁量経費）である。平成22、23、24年度の助成を受けた。各年度約520万円である。これを財源として京大の全部局を対象にした教職員・学生の派遣費用に当てている。

第4は、京大教育研究振興財団である。平成24年度に初めて助成をいただいた。300万円である。学部学生・大学院生・研究員の派遣についてご負担いただいた。京大らしい国際連携として、また教育への貢献を評価していただいたものである。

今後の展望を述べる。2010年度に発足した京都大学ブータン友好プログラムは、最初の3年間で10隊71名の派遣をおこない、2隊12名の招へい事業をおこなったことになる。そうした交流実績をもとに、2013年5月に松本紘総長がブータンを訪問する予定だ。京都大学とブータン王立大学のあいだで正式な協力協定（MoU）を締結する。今後のさらなる交流の礎になるだろう。

その一方で、学内組織としての陣容を整えたい。「京都大学ブータン教育研究ユニット」（仮称）というようなものである。学内の部局を横断して、ブータンに関心をもつ研究者がそこに集結する。半世紀前に、今西・桑原ら諸先輩が、ブータンでのフィールドワークを夢見た。昔も今も変わらないのは初登頂の精神だ。まだだれも行っていないところへ行き、まだだれも考えていないことを考え、まだだれも試みていないことを試みる。半世紀をかけて、その夢を実現していく段階へと

歩を進めたい。

## 謝辞

京都大学ブータン友好プログラムの実施にあたって多くの方々の協力を得た。個々人のお名前は割愛させていただく。本事業の主要な推進部局として位置づけられている霊長類研究所（平成24年度から平井啓久所長）ならびに事務局（総務掛）と国際センターに多大なご支援をいただいた。ここに記して謝意を表したい。また上記の財政的支援をくださった松本紘総長はじめ京都大学の関係機関並びに関係者に謝意を表したい。

## 引用文献

- Ashi Dorji Wangmo Wangchuck (1999) "of Rainbows and Clouds: The life of Yab Ugyen Dorji as told to his daughter", London: Serindia Publications. (ISBN 0-906026-49-0)
- Bhutan Meida Services (2012) "Bhutan: A mosaic of the dragon", Bhutan Media Sevices, (ISBN 978-1-56592-479-6)
- 堀了平(1986)「偉大なる獅子 マサ・コン峰登頂」、講談社
- 桑原武夫(1978)「ブータン横断紀行」、講談社
- 松沢哲郎(2011)ブータンと国民総幸福、発達
- 松沢哲郎(2012)京都大学ブータン友好プログラム：その歴史的展望、ヒマラヤ学誌、13号、233-241
- 松沢哲郎・辻本雅史・池上哲司・成瀬哲生・出水明(1995)ブータンにおける初等教育の素描：小学校とNAPEプログラム、ヒマラヤ学誌、6号、93-109
- 中尾佐助(1959)「秘境ブータン」、毎日新聞社；(1971)社会思想社；(2005)北海道大学図書刊行会；(2011)岩波書店一岩波現代文庫
- 西岡京治・西岡里子(1978)「ブータン 神秘の王国」、学習研究社；(1998)NTT出版
- Pek-Dorji, S. S. (2007) "The legacy of a king: The forth Druk Gyalpo Jigme Syngye Wangchuck", Department of Tourism, Bhutan. (ISBN 99936-624-6-1).

## Summary

### **Kyoto University Bhutan Friendship Program: The Summary of the First 10 Missions to Bhutan**

Tetsuro Matsuzawa

Primate Research Institute, Kyoto University

This article aims to introduce a program named KU-Bhutan. KU-Bhutan stands for Kyoto University Bhutan Friendship Program. KU-Bhutan is an outreach program of Kyoto University to promote the friendship and the mutual understanding of the two countries, Bhutan and Japan. Kyoto University has the good reputation for the field study of various disciplines. Bhutan is a small but attractive country in Himalaya. The first contact between Bhutan and Japan was the meeting in Kyoto, where Her Majesty the queen of the third king met two Kyoto University professors. Her name is Ashi Kesang Choeden Wangchuck. The two professors were Takeo Kuwabara and Johji Ashida. Based on the long history, KU-Bhutan was launched in 2010 as a new program to promote the field study of multiple disciplines in Bhutan. Bhutan was captured as an academic arena that could provide us the insight for the future of the world. There are five major areas: Health, Culture, Security, Ecology, and Mutual collaboration. This article introduces the aims and scopes of KU-Bhutan. It also illuminates the efforts since October 2010: KU-Bhutan has sent 10 missions of 71 persons in total and welcomed 2 missions from Bhutan of 12 persons in total. This is the record of the interaction. Please visit the following web site for further information. <http://www.kyoto-bhutan.org/>